

「リニューアル成った、『はだの歴史博物館』の見学と解説」に参加して

川崎市青少年科学館 内藤 武

令和3年6月4日、秦野市の「はだの歴史博物館」を会場にして令和3年度の第1回研修会が開催された。この研修会では、秦野市の考古専門博物館である桜土手古墳展示館が、はだの歴史博物館としてリニューアルをするに至った経緯と、同館の現状について秦野市生涯学習課文化財・市史担当学芸員の横山諒人氏よりレクチャーがあり、その後、館内見学を通じてリニューアルの現状について議論した。本研修会の内容について、感想を交えつつ報告する。

本研修会は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策として、午前・午後の2回に分けて実施した。幹事を除き、午前の部には9名、午後の部には17名の参加があった。筆者は午後の部に参加した。

1. レクチャー「桜土手古墳展示館」から、はだの歴史博物館へ～考古専門博物館の直営リニューアル！？～

はじめに、横山氏から、リニューアルに至る経緯についてのレクチャーがあった。はだの歴史博物館の前身となる桜土手古墳展示館は平成2年に開館した。昭和40年代以降、周辺の開発に伴って市が遺跡の保存に着手、出土品の陳列収蔵施設として桜土手古墳群の中に作られた。周囲の古墳公園と一体となる展示内容となっており、景観と調和したガラス張りの建築形態や古墳公園へつながる地下展示室「プロムナード」などが特徴的であった。一方、昭和60年代以降に秦野市に総合博物館を作る動きがみられ、平成2年には「秦野市博物館基本構想」が策定され、その後も歴史や民俗資料の収集が継続されてきたという。

その後、「秦野市総合計画2020」において、総合的歴史博物館への移行が明記され、桜土手古墳展示館ははだの歴史博物館へリニューアルすることになった。リニューアルにより、同館の展示テーマは「『はだの』の歴史と文化」となった。自然分野については、県立のビジターセンターが近隣にあるため、テーマからは外されたという。運

営の理念としては、①地域文化を未来へ継承すること②だれもが学べる生涯学習の拠点であること③地域住民が参加し、市民文化の向上を図ることの3点が掲げられている。

平成29年度～令和2年度までのリニューアルに関連する予算総額は3000万円程度と、決して十分な予算が確保されていない中ではあるが、展示室のケースの自作など職員の努力と工夫で出来上がった博物館になっている。また、実質の移設作業や工事は令和2年8～10月と工期が短く、Covid-19による臨時休館期間に東海大学の学生の協力などを得ながら、リニューアル作業を進めたとのことだ。

一方で、リニューアル後もいくつか課題がある。特に印象深かったものを挙げると、まず、職員の専門性の確保がある。常設展示は会計年度任用職員3名が各1テーマを担当し、特別展に関しても、正規職員はマネジメントに注力し、非常勤職員が中心になり企画しているという。また、紙資料の劣化を防ぐため、継続的な展示替えも必要となるとのことで、今後も運営にはマンパワーがより一層必要になると感じた。

さらに、収蔵庫の問題がある。展示館時代に作られた地下の「プロムナード」が、バリアフリー設備がないため閉鎖されており、現在は収蔵庫として活用されている。地下にあるため湿度が高く、夏場は70%を超える時期もあるが、除湿冷房にかかる電気代を抑えるため、空調は様子を見ながら使われている。雨漏りもしているとのことで資料を安全に保管できるのか少し不安がある。収蔵庫に入りきらないものは、市内小学校の旧校舎や空き教室を間借りしている状況ということであった。

これらの課題を抱えつつも、はだの歴史博物館として、令和2年11月にリニューアルオープンを果たした。「できることは委託せずに自前で作業する」という言葉が非常に印象に残っている。今回の直営リニューアルは「リニューアル」の語感から想像するものとは異なったが、予算が限られた中でより良い博物館を作っていく一つの方法だと

感じた。

2. 展示場見学

レクチャーに続いて、展示室の見学が行われた。展示室は常設展示と第1企画展示室、第2企画展示室に分かれている。常設展示は6つのコーナーに分かれており、古墳時代から近現代までの秦野市の通史を展開している。企画展示室は2室あり、研修時は第1企画展示室で「春季企画展『大安吉日祝いするとき』」第2展示室では「企画展『縄文時代のムラー中後期の集落の様子ー』」が開催されていた。

展示室は基本的には桜土手古墳展示館時代のコンセプトを継承して、そこに自作の展示台や、パネル展示、プロジェクターによる映像上映、タッチパネルなどを取り入れて工夫されていた。前述のとおり、展示パネルや展示ケースは職員や学生による自作である。アクリルパネルを組み合わせた土器の展示ケースは鍵もかけられるようになっており、館の皆さんの熱意を感じた。展示は、フォントや配色にユニバーサルデザインを取り入れており、自作ならではの細やかな配慮が行き届いていた。タッチパネルのコンテンツも職員による自作で、ガラス張りのため実物を展示できない紙資料

を中心に紹介している。展示館時代の写真と比べても非常に内容の充実した展示室に生まれ変わっていると感じた。

また、収蔵庫となっている地下のプロムナードの見学も行われた。研修当日が雨天だったこともあり、レクチャーで説明があった収蔵庫の湿度や雨漏りの問題などがより切迫して感じられた。

3. おわりに

低予算でのリニューアルに対して、現場の工夫で乗り越えたという印象を受けた。展示物制作の工夫は、他館でも活用できそうな機転を利かせたノウハウの宝庫であった。一方で、収蔵品の保存場所や維持管理の予算確保、専門職員の配置など苦勞されている側面も垣間見た。これらは、この社会情勢の中で他館にも共通する課題と考えられる。今回学んだ事柄を日々の業務に活かしながら、博物館としての機能強化に努めていきたい。

最後になりますが、本研修会でレクチャーをいただいた横山諒人氏をはじめ、はだの歴史博物館の皆様、このような研修会を企画していただいた県博協の皆様感謝申し上げます。



職員自作の映像素材



古墳が一望できる展示室



職員自作の展示ケース



地下プロムナードでの解説